

【2026 ワールドカップ・タシケント大会】

大会2日目を迎え、個人・団体ともに予選後半種目が行われた。日本チームは初日の試合を通じて得られた課題と手応えを踏まえ、修正を加えながら、より安定した実施と得点の積み上げを目指して臨んだ。

【個人：松坂玲奈】 個人総合 47 位

《3 種目目：フープ》

得点：22.400 (DB 6.30/DA 2.70/A 6.90/E 6.80/P 0.3)

大会2日目は、コンディション面に課題が見られる中での試技となった。朝から左肩甲骨周辺の痛みや下肢の不調が見られ、動きに制限がある状態での臨戦となった。

そのような状況の中でも、演技前半では大技を成功させるなど、持ち味である力強さを発揮する場面が見られた。一方で、DAにおいて場外への逸脱があり、予備手具への対応を余儀なくされた。予備手具との感覚の違いから操作に影響が生じ、終盤のリスクにおいても本来の構成での実施が難しく、内容を調整する形となった。

《4 種目目：ボール》

得点：20.600 (DB 5.10/DA 2.60/A 6.45/E 6.45)

フープでの課題を踏まえ、積極的に演技に臨んだが、序盤のリスクにおけるキャッチで落下が発生した。ボールを取りに行く中で動きや音楽とのずれが生じ、その影響により一部の技を省略せざるを得ず、以降の構成を調整する判断となった。

また、フェッテターンについても十分な実施が出来ず、本来の得点構成を発揮するには至らなかった。

本来、国際大会において安定した実施力を発揮できる選手であるが、今回はコンディションの影響を受け、持ち味を十分に発揮しきれない内容となった。

今後はコンディションの回復を最優先としつつ、ベテラン選手としての経験を踏まえたコンディション管理の在り方も含め、より安定して力を発揮できる体制の構築が求められる。

【個人 鶴田芽】 総合 30 位

《3 種目目：ボール》

得点：25.600 (DB 6.80/DA 3.70/A 7.50/E 7.60)

昨日のミスの影響から不安も見られ、直前まで入念に確認を行う様子が見られた。演技自体は落ち着いて進めることができたものの、リスクにおける加点を十分に得ることができな

かった。

フェットバランスではポップ移動が入り難度が成立せず、ラストのリスクにおいても投げの距離が不足したため回転数を調整してのキャッチとなった。一方で、大きなミスなく演技をまとめ、落下なく終えることができた点は評価できる。

今後は、リスクにおける投げの精度および回転の確実性を高め、加点を取り切る実施力の向上が求められる。

《4種目目：フープ》

得点：24.900 (DB 7.00/DA 3.40/A 7.35/E 7.45/P 0.3)

新作品であるため、ミスが起きやすい箇所を中心に直前まで確認を行い本番に臨んだ。3連続のDAはテンポよく実施できていたが、胸上での軸回しにおいて回転不足が見られた。前半のステップでは音楽に乗り伸びやかな動きが見られた一方で、前バランスにおける手具操作ではフープが身体に近くなり操作不足となった。後半のリスクでは、フロア際での投げや音楽とのずれによりDAを抜く判断となり、加点を抑えた実施となった。また、足投げのリスクでは投げが大きくなり、回転を伴いながら場外でのキャッチとなった。流れを止めずに演技を継続したものの、その後のバランスにおける手具操作が不明確となる場面が見られた。

今後は、各要素の精度と手具操作の明確性を高めるとともに、音楽との一体感を意識した構成全体の完成度向上を図り、持ち点を確実に得点へとつなげていくことが重要である。

【団体】 総合6位

《2種目目：フープ3クラブ2》

得点：22.150 (DB 4.60/DA 6.10/A 6.45/E 5.10)

本日の演技は、全体として課題の多く残る内容となった。練習段階では集中力も高く、チームとしてのまとまりも見られていただけに、1つのミスをきっかけに心身の不安定さが表出した点は、今後に向けた大きな課題である。

演技においては、CRにて1名の投げが真上となり、背後の選手がカバーしたものの、その後リズムを取り戻すことができず、ステップ中に落下が発生した。この影響により、芸術面においてダイナミックチェンジおよびステップが未実施となり、大きな減点につながった。また、この場面で流れを立て直すことができず、チーム全体に焦りが生じた。その後も、Rの不成立や続くCRにおいて投げの体勢が整わずシリーズを実施できない場面が見られ、隊形の乱れが共同作業にも影響を及ぼした。さらに後半においても乱れが続き、

終盤では本来予定していた CR2 が実施できず、不必要な落下を重ねる結果となった。

現行ルールにおいては、ミスを最小限に抑える力が不可欠であり、そのためには精神面・技術面・体力面すべてにおける余裕が求められる。本演技では、その力の不足が明確となった。また、日本チームは力みが生じやすく、その影響で投げの高さが過剰となり、演技全体の時間的な余裕を失っている傾向が見られた。

今後は、投げ受けの高さや軌道を再確認するとともに、フォームの改善と技の精度向上を図る必要がある。加えて、事前合宿中にはメンバーの怪我といったアクシデントもあり、メンバーを固定した状態で十分な通し練習を積むことができなかったが、そのような状況下においても演技をやり切る強さが求められる。

本番においても安定して力を発揮できるよう、技術面・精神面の両面から強化を進めていきたい。

〈出場選手〉

田口久乃

西本愛実

花村夏実

田中友菜

三好初音

Live results link:

<https://www.sportvokrug.com/sports/rg/event/14878/results/>